



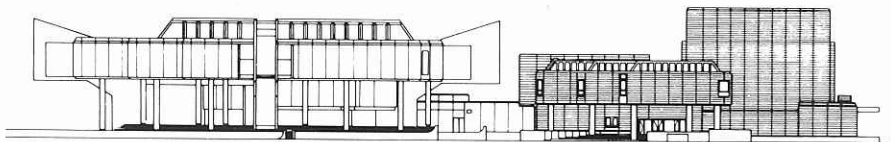
李白詩「登金陵鳳凰臺」屏風 副島種臣筆

佐賀県立博物館・美術館報

SAGA PREFECTURAL MUSEUM · SAGA PREFECTURAL ART MUSEUM

31 May 1995

No. 109



常設特別展案内 副島種臣の《観帖覚》

明治38年(1905年)78歳で副島種臣が死去して今年で90年になる。代表作《李白詩『登金陵鳳凰臺』屏風》(表紙)ははじめ42点を展示している。

種臣は、明治初年頃の40才代から書を手がけている。種臣が書制作をはじめたきっかけは不明だが、安政6年没の兄枝吉神陽に書屏風などの作品があることは、神陽の強い影響下にある種臣を書制作に駆り立てた要因のひとつに挙げられよう。

また種臣の書の題材に李白、杜甫などの漢詩が好んで取り上げられており、当然中国書にたいする興味も書制作の根底にあったといえよう。明治6年と同9年(11年まで)の二度中国に渡ったことは中国書との出会いの機会であったと推測される。またここに紹介する《観帖覚》は中国書の知識を具体的に物語っている。

《観帖覚》は半紙に朱で書かれた八枚からなり、八枚には一から十までの番号が記されており、四と五が失われている。本文は「蘭亭」、「十七帖」、草書(後半欠失)、飛白(前半欠失)、「運筆正偏」、「搨鏡」、碑石、法帖の各項目別になっている(見出しの有るものは「」書きとした)。

体裁は朱書きによる粗放な筆跡で訂正箇所があり、送り仮名には片仮名主体に一部平仮名が混じっている。また記述の順序は恣意的で「碑石」のみ簡条書きとするなど、既存のものを写したというより覚えとして控えたとみるべきであろう。

以下本文と写真を掲載し、内容の検討と制作時期については今後の課題としたい。(読みは新潟大学鶴田一雄助教授、東京学芸大学飛田昭博氏の御教示を得ました。 学芸員 福井尚寿)

【一】唐太宗王羲之書ノヲ集三千六百紙ヲ得リノ蘭亭記楽毅論最ノ重宝セシ朕千秋ノ後ノ太宗崩御ノ時昭陵工納メノラレタト云太宗曾テ蘭亭ノ摹本ヲ諸國ノ鎮工ノ賜リ時定武縣ニノ玉石ヘ写刻是ヲ定武ノ帖ト云又歐陽詢精ノ遂良臨書セシ是レヲノ唐臨帖ト云其後摹本ノ甚多シ宋ノ宣以道

【二】八蘭亭一百十七本ヲ集ノテ雕刻セリ明ノ周憲

〈「没後九十年 副島種臣の書」より〉

会期：5月19日(金)～7月9日(日)
王ノノ集タル蘭亭帖ハ世ニノ多シ見ル人モ又多シノ蘭亭話シノ十七帖ノ王羲之十七帖ハ唐貞觀年中ノ二十七帖アリ卷首ニノ十七日ト云アル故ニ十七帖ト云羲之蜀ノ太守ニノ贈ル尺牘縮字シテ文字ヲ縮ミテ

【三】後世好事ノ者ノ書ナリノ又前後二大觀淳化ノ印ノ双龍門印緒家印押ノ孫過庭ノ跋ノアリ是レハノ馬苑甫カ題セシ跋文ヲキリノトリツテ孫過庭ト名ヲ書イテノ帖ノ題トナセリノ十七帖ノ蜀草口録草唐ヨリノ已前ノ人ノ草ハ多ク蜀草ノ兩三字ニスギスノ草書ヲ学ブニハ先ツ二王ノノ觀テ張旭懷素編傍ノ

【六】詔ヲ得テ殿門工習セラレシノ額石清水八幡宮ノ三大字ノ空海飛白ノ体世ニ神ノ秘文ト云飛白ノ書ハノ漢ノ末魏ノ初宮閣ノ二題書セシ体ナリノ世ニ云三絲飛白五絲飛白ノ云事アリノ○運筆正偏ノ書法ニ正ハ骨ヲ立テノ偏ハ態ヲトルニ法訣可カラス

【七】搨鏡ノ習字ニ臨摹響搨硬黃アリノ臨ハ見テカク事摹ハスキ写ス事ノ響搨ハ日ノ光リヲウケテ古書ノヲ写ス事響搨ノ題書トモ云ノ硬黃ハ蠟引キ紙ヲ云ノ双鉤鉤填ノ題ハハコ字ノソノ内ニ墨ヲスリウメルノ鐘録ノ正書ハ王逸少ノ習ト云淳化帖ニ載テノアル唐ノ李懷琳カ偽作ナリ

【八】碑石ヲ立シ事三代ノ比ヨリ始ルノ夏ノ禹王鉤嶽山碑ノ周ノ穆王壇山碑後人ノノ周宣王石鼓文國子鍾ニアルノ孔子ノ書殷此于墓後人作ノ吳李札墓後人作ノ秦李斯カ嶧山碑ノ秦山碑ノ集字ノ事後ニ書スノ宋太宗歷代名人真蹟ヲノ侍書王著ニ命シテ模刻ノセシメ十卷ト成シ淳化閣帖ト云

【九】歷代法帖ノ祖ト云コレヨリノ前五代時代法帖二部アリノ澄清堂ト云唐賀知章古人ノ書ノヲ摹タルヲ南唐ノ時石ニノ刻スノ鐘録尚書宣示帖淳化帖ノニノセタルハ王右軍ノ臨書ナリノ王羲之楽毅論ハ正書ノ梁代ニ模出セシ唐ノノ太宗崩御ノ時蘭亭ノ記ハノ同シク昭陵ニ納セシヨシノ今淳熙閣續帖ニアルハ楽毅論

【十】梁世ノ摹本戲鴻堂帖ノニアルハ唐ノ摹本ナリ

エッセイ

用語としての「写真」—明治時代—

「写真」という言葉がいつから使用されるようになったのか。そのことを考えるための資料を提示したい。

1985年(昭和60)、東京国立近代美術館と京都国立近代美術館において「写実の系譜Ⅰ—洋風表現の導入—江戸中期から明治初期まで」が開催された。その後「写実の系譜」はシリーズとして「Ⅱ—大正期の細密描写」(1986年)、「Ⅲ—明治中期の洋画」(1988年)、「Ⅳ—絵画の成熟—1930年代の日本画と洋画」(1994年)とつづいた。この間に、「日本のリアリズム 1920s-50s」が北海道立近代美術館、下関市立美術館で開催された。

日本近代美術史における「写実」の意味がひろく問われることとなった。

ただし「写実」という外周におさまられた作品は、ジャンルにおいて人物画、風景画、静物画、花鳥画とさまざまであり、これに戦争画、プロレタリア絵画まで加えるとまさに「写実」の外延は飽和状態を呈したかのようである。

あらためて、「写実」とは何であるのか。そのことは作品そのものにおいて問われるべきであるが、同時に、わたくしたちが使用する言葉の歴史も吟味されなければならない。

「写真」について

・慶応元年(1865)〈泰西諸州ノ画法ハ元來写真ヲ貴ベリ。(略)真ニ逼リ妙ニ至リ活潑生動セント欲スルハ是レ写真ノ貴キ所タリ。其基本タルヤ、着色濃淡ニアリ。〉(高橋由一「洋画局物語」)

・明治2年末~4年(1869~71)〈西洋各国中高尚の画図に於る、悉写真写生にして毫も杜撰ある事なし。〉(高橋由一「洋画史料」)

・明治7年(1874)〈写真の都下に行はるや未だ十年を出ず、而して已に錦画と顔頗す。(略)人其の真画を見て皆其の妙術に驚き、來つて写を乞ふ者幅々々々、忽ち其の名を四方に掲ぐ。〉(服部静松「東京新繁昌記」「写真」の項)

「写真」は、本来中国絵画においては肖像画を

意味した。張彦遠著「歷代名画記」(847年)に「嘗て殷仲堪の真を写さんと」(顧愷之の項)、「尤も写真を能くす」(歴代の能画…梁の項)とあり、「芥子園画伝四集」には「写真秘訣」として「写真の一事、須らく知るべし意は筆先に在り」とあり「真」は肖像、「写真」は肖像画を意味した。

しかし、幕末、明治初期のわが国においては、「写真」は「肖像画」という意味に限定されていなかった。高橋由一の「洋画局の言」にみるように、「写真」の基本は着色濃淡であり、それは「人巧ニ欠クヘカラザル所ノ実技」という技法の問題であった。

司馬江漢の「西洋画談」(1799年)は、由一の画論につながる。

・〈扱彼西洋諸国の画法ハ 写真ニして其法を異ニす〉

・〈其写真と云ハ 山水花鳥牛羊木石昆虫の類を画くニ 毎見ニ新ニして 画中の品物悉飛動するカ如シ〉

明治初年、「写真」は一方では写真機として世人の耳目に触れはじめていた。服部無松の「東京新繁昌記」「写真」の項には「其の業をひさぐ者都下に蔓延し、現今は已に数十名に及べり」として記されている。1843年(天保14)ダゲレオタイプの写真機一式がもたらされ、1862年(文久2)には長崎と江戸で写真館が開かれて「未だ十年を出ず」の頃である。

・明治18年(1885)〈……写真を一枚取いだして、(略)こんな写真が密で居たのさ。トいひつゝ、写真をさし示せば、(略)件の写真」(坪内逍遙「味と骨かみ」)

・明治22年(1889)〈総体日本の写真家の写真を見ますに〉(浅井忠「写真の位置」「写真新報」)

明治20年代、「写真」は(一)写生、(二)写真鏡、(三)写真術にて写し取りたる画、という基本的な意味が成立していた。そしてこの同じ20年代の初めには、「写真」は上の意味の(一)の写生から、(二)と(三)の写真機とその画像へと比重をうつしつつあった。

「写生」について

「写真」の意味の一翼を担う「写生」については、修業段階でのひとつの技法とみなすことができる。1888年(明治21)に制定された東京美術学校規則には、絵画科、彫刻科ともに第一、第二年では、古画臨模、古製模造とともに写生が最大限時間を割り当てられている。しかし第三年では、「新案」が週の8割の時間を占め、写生の時間がなくなっている。

・明治9年(1876)〈凡ソ写生ノ法則ハ、假令好趣ナリト雖モ、天然ノ儘ニテ写生シ優等ノ画トナルハ稀ナリ〉(『フォンターズ講義』藤堂三玉録)

・明治32年(1899)〈絵画の自然を写すと、写真(フォトグラム)の自然を写すとは、その写しかた、決して同じからず。(略)絵画の自然を写すや、修業(スタデエ)の爲の写生の外は、現前の自然の法則を写すことなし。〉(『美術評論』17)

・明治42年(1909)〈今日の写生所謂モデル主義の大害は第一に感想即ちある心持ちを逸する事である。〉(藤野野の人「写生の意義及び其価値」(『日本及日本人』308)

「写実」について

・明治23年(1890)〈新聞の読物は理想でも写実でもそんなことは構つたものにあらず〉(藤野藤雨「勇闘」(『大同新聞』9・27~10・17))

・明治25年(1892)〈紅葉は写実の点より(略)女性はどこまでも女性らしく写すを可とす、どこまでも自然に応ふを以て写実主義の本色となす可し。〉(北村透谷「加藤礼社及び新案本集」(『女学雑誌』308、309))

・明治27年(1894)〈彼等の或者は、公然吾人を嘲りて日はく「早稲田の写実党云々」(略)彼等は何を證として吾人を写実党とするか。彼等の所謂写実は、吾人が排斥する写実たるを知れりや。〉(坪内逍遙「早稲田文学」(4号))

・明治27年(1894)〈自然と藝術との関係に連り来たるは写実的と理想的との問題なるべし。ラスキンは盛に模倣を排撃して、実(Perceptive truth)と真(Truth)とを区別し、美術の本旨は真を写すにありて、実を写すにあらずとせり。〉(島村抱月「審美的意識の性質を論ず」(『早稲田文学』))

・明治33年(1898)〈以上述べし如く実際の有のまゝを写すを假に写実といふ。又写生ともいふ。写生は画家の語を借りたるなり。〉(正岡規「叙事文」(『旧刊』1・20、2・5、3・12))

・明治34年(1901)〈…写実主義(略)要するに写実と申すのは、御承知の如く、英語の「リアリズム」といふ語で、(略)明治十七八年頃から初めて新氣運を呼び起こして。其旗じるしは写実といふ意味の下に鮮明にせられて、以て今日の盛運に及んだものであります。而して今日はすでに幣にまで流れんとしてゐる次第であります。〉(島村抱月「写実趣味と日本の文藝」(『東京美術学校校友会雑誌』5))

・明治35年(1902)〈凡そ絵画に於ける写実法は、精密に観察すれば頗る複雑なる項目に分たるべしと雖も、今は假に形似、設色、遠近法、明暗法の四項に分ちて考察するを以て足れりとせむ。〉(高橋牛「日本画の過去将来に就て」(『太陽』))

・明治35年(1902)〈吾が小説界は、未だ充分に写実主義を明瞭せず。吾が所謂写実派とは何ぞや。〉(長谷川天溪「不自然は果して美か」(『太陽』))

「明治文学全集」(筑摩書房)及び当時の美術雑誌等を参考に「写実」の用語事例を抜きだしてみると、「写実」という言葉が登場するのが、おおよそ明治20年代初めからであろうということがみとめられる。この「写実」の登場は、ちょうど、「写真」の意味が写真機及び写真画像へ移行することと重なる。

しかし、美術用語としての「写真」と「写実」の交錯はそれほど単純ではないだろう。「写実」ははじめ文学用語として使用されたからである。明治30年代の辞書においても、「写実」の用語例は、「小説などにいう」とされている。その文学用語としての「写実」が、明治30年代をつうじて絵画、彫刻の分野においても登場し、そののち、明治末頃から大正、昭和にかけて、単なる写生ではない写実(リアリズム)の意味が問われることになるのである。

(企画普及係長 松本誠一)

調査ノート

平成6年度 県内社寺調査 概要報告

博物館で実施している県内の寺院、神社の文化財調査は平成6年度で3年目になる。館報での概要報告も102号(平成4年度分)、105号(平成5年度分)について3回目である。

〈平成6年度の調査について〉

・調査区域と対象の社寺

今年度の調査は、佐賀県南部の平野部、旧佐賀藩領を中心とし、佐賀市、鹿島市、佐賀郡、杵島郡、藤津郡の13市町村にわたった。

所在確認のための1次調査は82ヶ所、重要な箇所について詳細に調査する2次調査は18ヶ所にのぼった。

・調査の成果

昨年度までの調査をもとにして、佐賀市・妙福寺の大日如来像(平安時代)、玄海町・値賀神社の新羅金銅仏ほか御神宝類、玄海町・普恩寺の観音菩薩像(湛勝 南北朝時代1342年)、武雄市・貴明寺の後藤貴明像(感定軒 桃山時代1583年)の4件が市町村の文化財として指定された。

今年度の調査は、量的には仏像・神像が大きな割合を占めたが、鍋島氏の菩提寺である高伝寺において絵画作品に貴重な取獲を得た。主な資料は下記のとおり。

- 木造如来形立像(東光寺) 平安時代 9世紀
- 紺紙金銀泥法華経(高伝寺)平安時代 12世紀
- 釈迦・阿難・迦葉像(高伝寺)狩野探幽筆
- 釈迦三尊像(高伝寺)周徳筆
- 吉祥天曼荼羅(玉泉坊)南北朝時代 15世紀

付記：平成6年12月に相知町重要文化財の銅造如来形立像(今山神社)が盗難に遭った。この像については平成4年度に調査し、管理状況の改善について神社側と町教委、当館の三者で検討していた最中の出来事であり、大変に残念である。

(学芸員 竹下正博)



紺紙金銀泥法華経(高伝寺)平安時代 12世紀



釈迦・阿難・迦葉像(高伝寺)狩野探幽筆



銅造如来形立像(今山神社)

あ い さ つ

新緑が目眩しい爽やかな季節になり、ここ博物館、美術館の周りの公園の中を散策される人も何んとなく増してきたような気がします。そのうちの何人かは当館に足を向けていただくが、殆どの人は過ぎ去って行かれます。「魅力ある博物館、美術館とは…」、「誰もが気軽に足を運んでいただく館にするには…」と、4月1日赴任以来模索を続けている昨今です。

「物」が古くなること、よく「もう、これは博物館行き」などと云う言葉を聞きますが、博物館はもちろん倉庫ではありません。博物館、美術館は正に宝の山であり、芸術・文化の拠点でもあります。特に博物館は、我々大人が忘れかけている幼年時代、少年時代の息吹さえもそのまま現在も聞こえてくる唯一の場所でもあります。

大人の方の来館はもちろんですが、今特に考え

館長 深川 弘一

ているのは、学校との連携を密にして、少なくとも小中学生は一度は博物館、美術館に行った事があるという経験を是非させたいと色々方策を検討しております。



物の豊かさから、心の豊かさへと云われる昨今生涯学習の一つの機関としてはもとより、子供達が真に思いやりがあり、心豊かな人間に成長してくれる一助に博物館、美術館がなればと県民の皆様はじめ関係者のご支援を頂きながら微力ではありますが、頑張っていきたいと思っておりますのでどうかよろしくお願いたします。

人事移動

4月1日付人事異動で下記のとおり職員の異動がありました。

転入

館長 深川 弘一（教育次長より）

総務課 課長 大園 進（佐賀コロニー管理課長より）

総務課 主査 古賀タミ子（植物病虫害防除所主査より）

学芸課 主査 宇治 章（九州陶磁文化館主査より）

転出

館長 山本 敏秋（退職）

総務課 課長 菊池 文夫（図書館総務課長へ）

総務課 主事 赤星由季子（多久職業能力開発校へ）

学芸課 主査 宮原 香苗（九州陶磁文化館主査へ）

お知らせ

① 「古賀忠雄彫刻の森」は平成6年（1994年）3月29日開園しましたが、その後県内外から多くの見学者を得ております。

このたび、開園1周年を記念して「古賀忠雄彫刻の森」の展示作品のリーフレットを作成しました。野外設置作品全点のカラー図版と略年譜を掲載しています。

② 「先覚者紹介ビデオ」として平成4年度から3ヶ年で作制していましたビデオがこのたび完成しました。「百武兼行」（15分）、「久米桂一郎」（15分）、「岡田三郎助」（30分）の日本近代洋画史の代表的な3人の洋画家の画歴を紹介するビデオです。館内でのビデオ鑑賞及び教育機関等での利用を計画しています。

行事案内

4月⇨6月

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
| | | | | | | 1 |
| 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| % | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
| 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | |
| 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 |
| 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 |
| 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 |
| 28 | 29 | 30 | 31 | | | |

| | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 日 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 | 土 |
| | | | | | | 1 |
| 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 |
| 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 |
| 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 |
| 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 |
| 30 | 31 | | | | | |

カレンダー内。□印は休館日

| 常 設 展 | | | | 展 覧 会 | | | |
|--------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------|------------------------------------|---------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------|--------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 観覧料大人200(150) 大学150(100) ※高校生以下は無料、()内20名以上団体 | | | | 枠内に明記する以外は無料 | | | |
| 博 物 館 | | | | 美 術 館 | | | |
| 1号展 | 2号展 | 3号展 | 大 展 | 1号AB展 | 2号展 | 3号展 | 4号展 |
| 自然史 生きものたちの まわりの ほか 5/14 | 考古・歴史 佐賀藩の歴史 ほか 5/14 | 平成6年度 新取 蔵 品 展 5/14 | 民俗 干渉の歩み ほか 5/14 | 工芸之匠 鶴島鍛造―もめんの華― 5/21 | 面 白 馬 会 の た ち 5/21 | 平 成 6 年 度 新 取 蔵 品 展 5/21 | 休 室 |
| 第62回 独 立 展 4/21(金)～4/30(金) 佐賀新聞社 大人800(700) 大学生500(400) 中小生300(200) ※()内は前売・団体料金 | | | | | | | |
| | | | | 彫 刻 5/24 工 芸 之 匠 鶴 島 鍛 造 ― も め ん の 華 ― 7/2 | 自 居 業 の 匠 々 た ち 6/4 | 平 成 6 年 度 新 取 蔵 品 展 6/4 | A I S 展 II 1995 5/3(金)～5/28(日)グループSUS 第12回 佐賀県写真協会公募展 5/23(火)～5/28(日)佐賀県写真協会 第36回 東光会佐賀支部緑光展 5/30(火)～6/4(日)緑 光 会 |
| | | | | 第3回 梧竹・蒼海園影 佐賀県書道展 (前期) 6/9(金)～6/11(日) 佐賀新聞社 (後期) 6/14(水)～6/16(金) | | | |
| | | | | 第78回 佐賀美術協会展 6/22(木)～7/2(日) 佐賀美術協会 | | | |

日 誌

正月開館

これまで休館していた年末・年始のうち、今年
は1月2、3日の両日を特別に開館しました。こ
れは「帰郷時にゆつくりと郷土の歴史や文化、美
術を楽しみたい」という県民の要望に応えたもの
です。博物館の常設特別展示「幕末・明治の浮世
絵」は特に無料で1,000人をこえる方にご覧いた
だきました。美術館の「パスキンとエコール・ド・
パリの異邦人たち」展(美術館・佐賀新聞社共催)
は半額で約3,300人にご来館いただきました。



戦国を駆ける武将たち
—五州の太守 龍造寺隆信の時代—
佐賀県立博物館 2/3～3/12

佐賀県立博物館・美術館報 第109号 平成7年5月31日
編集発行 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館
〒840 佐賀市内1-15-23 TEL0952-24-3947 FAX0952-25-7006
印 刷 日之出印刷株式会社